帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

中世出土銭貨研究の現状

―国内模鋳銭を中心に―

嶋　谷　和　彦

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．国内出土の銭鋳型と模鋳銭の生産
Ⅲ．国内模鋳銭の実在と流布
Ⅳ．模鋳銭生産資料の化学分析
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

中世遺跡の発掘調査において、各種遺物と共に銭貨が出土するケースは、その枚数の多少こそあるものの、遺跡の性格を問わずほぼ汎日本的に、いわば普遍的に確認される現象である。また、土木工事や造成工事の際に、特に大量の銭貨が一括で不時発見される事例も各地で報告されており、決して稀少な状況であるとは言い難い。

このように資料数としては相当の蓄積があるにも拘らず、従来のその研究は他の遺物、特に在地土器や国内外の陶磁器研究に比して、考古学の対象資料として取り上げられる機会は必ずしも多くはなかった。その要因としては、例えば、銭貨の材質上の問題、即ち錆を落とす為のクリーニングの厄介さ、時には金属であるが故に出土後には保存処理担当者の手元に渡り、直接の発掘担当者とは分離してしまうという作業体制や、銭貨の銭種・書体の多様性、中世の出土銭貨は全て中国からの渡来銭であるといった誤った先入観等、銭貨の文字資料としての側面が指摘できよう。

もちろん、上記のような既往の一般的な対応の中、埼玉県の栗原文蔵、石川県の芝田悟、広島県の是光吉基等に代表される一部地域の熱心な研究者による地道な努力や、1980年代の定点と言うべき坂詰秀一編による全国的視野での実態総覧（坂詰編1986）や鈴木公雄・櫻木晋一による大量一括埋蔵銭（「備蓄銭」）・六道銭を用いた銭貨流通論（鈴木1992・1994、櫻木1991・1994）等特筆すべき業績も存在するが、ここ2～3年の間には中世出土

銭貨研究の集大成とでも呼ぶべき永井久美男編の3部作（永井1994・1996a・1996b）が出版されたり、歴史資料としての出土銭貨を研究対象とした全国的・学際的なネットワークである「出土銭貨研究会」が発足したりとその進展には目を見張るものがあり、横山浩一は「急速に頭角をあらわしてきた成長分野」（横山1995）といった評価を与えている。

このように1990年代に入って急成長を遂げている中世出土銭貨研究の中から、本稿では最新の研究ジャンルのひとつとして注目を集めると共に、かねてより筆者が取り組んできた銭鋳型と国内模鋳銭にテーマを絞って、若干の現状整理と化学分析から見た問題提起を行いたい。

II．国内出土の銭鋳型と模鋳銭の生産

現在までのところ、国内で銭鋳型の出土が確認されている場所としては、京都・鎌倉・堺・博多の4都市が挙げられる。

京都では、1978年に当時の職人町の一角である「七条町」に該当する平安京左京八条三坊七町の14世紀中頃の生活面から、たった1枚ではあるが政和通寳の鋳型が出土していた（鈴木ほか1982）がその実態は不明な部分が多く、出土事実に対する歴史的評価も脇田晴子が撰銭令との関連で注目した（脇田1988）ことを除けば、それほど大きな反響にはならなかった。ところが、1995年には再度、2箇所の地点において銭鋳型の発見があった（山本1996）。1つは平安京左京八条三坊六町で、14世紀中葉の別々の柱穴内より各1点ずつ出土しており、もう1つは平安京左京八条三坊三町で、13世紀後半の土壙より一括して良好な資料が得られている。両地点はいずれも既往の「七条町」よりもやや南西に位置する「八条院町」に該当する場所であるが、ここも職人層との関連が強い地点である。

鎌倉では、今小路西遺跡の15世紀初頭の井戸内から、開元通寳・乾元重寳・政和通寳の鋳型が出土した（宗臺1991・1993・1994a・1994b）が、当遺跡は都市外縁の「長谷小路」周辺の職人層の居住地域に該当し、遺跡の立地・性格共に先の京都の事例と共通するところである。

一方、堺の模鋳銭生産については、16世紀中頃～後半の都市中央の6箇所の調査地点において銭鋳型が出土している他、別の2地点でも鋳放銭・湯道バリ（鋳棹）等の銭生産に伴う金属資料が見つかっている。京都・鎌倉とは年代並びにその規模や生産体制に大きな相違が存在することもさることながら、堺の銭鋳型で特筆されるのは、開元通寳～洪武通寳に至る21種計198点もの銭種が判読できた点と、表裏共に全く銭文の存在しない無文銭を大量に生産していた点であろう。前者の鋳型の銭種の中に、当時既にかなりの流通量が確立していたはずの永楽通寳が皆無なのは、意図的に種銭として採用しなかったものと考

えられる。また、後者の無文銭の生産について、中島圭一は、明応9年（1500）の幕府撰銭令に登場する「日本新鋳料足」との強い関連性を指摘している（中島1996・1997）が、13世紀後半～15世紀初頭の京都・鎌倉の銭鋳型の中に無文銭鋳型が確認できないこととも矛盾しない。尚、技術論も含めた堺の銭生産の実態については、既に述べている幾つかの拙稿（嶋谷1993・1994ａ・1994ｂ・1994ｃ）を参照されたい。

博多では、博多遺跡群第85次調査において、石製・土製の銭鋳型が各1枚ずつ出土している。その時期は出土層位より15～16世紀初頭であるが、両鋳型共、残念ながら小破片で銭種は不明である。

いずれにせよ、これらの銭鋳型の発見を、佐原　真は、中国銭を鋳写した各種の模鋳銭が国内で本格的に生産されていたことを考古学的に実証したものと評価する（佐原1995）が、従来の出土渡来銭の銭種別順位の上位を占める銭、換言すれば、中世の流通銭貨の多寡はこれら国内模鋳銭の実在をそのまま反映しているものと考えられよう（嶋谷1997）。また、皇朝十二銭の廃止以後、専ら中国を中心とする渡来銭に依存していたとする従来の中世の銭貨流通に対する教科書的認識に再考を迫る資料であることは言うまでもないが、森　浩一は、今後渡来銭の初鋳年を用いた年代決定法に警鐘を鳴らす資料として注意を促している（森1993）。

Ⅲ．国内模鋳銭の実在と流布

前章の銭鋳型の出土を受けて次なる課題として当然出てくるのは、各地の消費遺跡での模鋳銭の実在性と混在率の問題である。

前者の実在性については、各地出土の主要な大量一括埋蔵銭（「備蓄銭」）を対象として検討を加えてみると、国内模鋳銭は最新銭が至大通寶（1310年初鋳）である2期（鈴木1992）の一群から登場し、南宋銭の場合には確認できないことより、14世紀第1～第3四半期以降には、採用銭種が唐・北宋銭中心の模鋳銭が、道南～九州までほぼ全国的に流布している姿が浮上してくる（嶋谷1997）。

後者の混在率については、残念ながら従来の出土銭の報告書を見ても、その殆どは銭文による銭種別の分類を行っているだけであるので、現状での検討はまだまだ困難な段階である。今後はそれに向けた資料増加を計る為にも、渡来銭の本模を視野に入れた整理作業が必要になってくるが、模鋳銭は表面の銭文が不鮮明で、裏面が平坦であり、極めて厚みが薄く、直径が小さい等といった外観及び法量上の諸特徴が挙げられる（嶋谷1994ｂ・1994ｃ）ので、特に出土銭の報告時には外径（直径）・内径（外径から両外郭幅を引いた径）・厚みの計測と、表裏両面の（できれば原寸大の）拓本の掲載をお勧めしたい。

Ⅳ．模鋳銭生産資料の化学分析

さて、今一つ今後の本模の識別に極めて有効であるばかりでなく、国内における模鋳銭の鋳造技術や銅生産の問題にも深く関わってくると思われるのが、化学分析から見た国内模鋳銭の金属組成の特徴である。前述した堺出土の銭鋳型と共伴した鋳放銭・湯道バリの化学分析を実施したが、極めて興味深い結果が得られた（富沢・嶋谷ほか1997）。

堺の銭生産に伴う金属資料は、螢光X線による定性分析では全試料に鉛・スズが全く認められず、また中性子放射化による定量分析では銅の比率が80数％前後という高い数値が測定された。通常、銭は三貨の中では銅貨（銅銭）に分類されてはいるが、本来は銅・鉛・スズの主要3元素から成る合金であるので、「青銅銭」と呼ばれるべき貨幣であるのに対して、堺で生産された模鋳銭・無文銭は、鉛・スズが全く添加されず銅の純度が高い、本当の意味でのピュアーな「銅銭」であった。

このように外見は同じ銭貨であっても、化学分析によってCu－Pb－Sn系とCu系の銭貨が存在することが明確になった以上、今後は全ての銭貨を銅貨（銅銭）と呼称せず、清銭が銅に亜鉛を含む「真鍮銭」であるように、前者を「青銅銭」、後者を「銅銭」と忠実に区分することを提唱したい。

生産地側からの国内模鋳銭の金属組成のデータの1つが提示できたので、是非とも消費地においても銭貨の化学分析を実施されたい。中性子放射化分析は破壊を伴うが、螢光X線分析なら非破壊なので、せめてこれによる定性分析だけでも実施して戴けるよう切望する。前章で触れた外観・法量的特徴に、この金属組成の特徴を加えた総合的な検討は、今後の中世銭貨の学際的研究の1つの方向を示していると言っても過言ではなかろう。

Ⅴ．おわりに

以上、中世の出土銭貨の中でも銭鋳型と国内模鋳銭に限定して、近年の現状と若干の問題提起・展望を述べてきた。当初はこれ以外の中世出土銭貨の諸問題の現状についても言及するつもりであったが、諸般の理由で実現できなかったことをお詫びしたい。特に本稿で触れてきた国内模鋳銭と密接な関係にある無文銭については、機会を改めていずれ考察を加えたいと考えている。尚、今回の筆者への依頼項目を多少なりとも補う為にも、最近（1993年～1996年）の中世出土銭貨研究の主要文献目録を付載しておくので、大方の御寛恕をお願いすると共に、御利用戴ければ幸いである。

（堺市立埋蔵文化財センター）

引用・参考文献

坂詰秀一編　『出土渡来銭 ― 中世 ―』（考古学ライブラリー45）　ニュー・サイエンス社　1986

櫻木晋一　「九州地域における中・近世の銭貨流通 ― 出土備蓄銭・六道銭からの考察 ―」『九州文化史研究所紀要』No.36　九州大学文学部　1991

櫻木晋一　「九州における中世末の銭貨流通 ― 出土洪武通寶を中心に ―」『社会経済史学会第63回全国大会報告要旨』　神戸大学　1994

佐原　真　「原始・古代の考古資料」『岩波講座　日本通史』別巻３　岩波書店　1995

宗臺秀明　「今小路西遺跡出土私鋳銭雑考」『鎌倉考古』No.20　鎌倉考古学研究所　1991

宗臺秀明　『今小路西遺跡 ― 由比が浜１丁目213番３地点 ―』　今小路西遺跡発掘調査団　1993

宗臺秀明　「中世の模鋳銭と社会 ― 鎌倉の事例を中心として ―」『中世都市研究』No.３　中世都市研究会　1994 a

宗臺秀明　「鎌倉の模鋳銭」『中世の出土銭』　兵庫埋蔵銭調査会　1994 b

嶋谷和彦　「中世の鋳銭 ― 堺出土の模鋳銭資料を中心に ―」『第３回鋳造遺跡研究会資料集』　鋳造遺跡研究会　1993

嶋谷和彦　「中世の模鋳銭生産 ― 堺出土の銭鋳型を中心に ―」『考古学ジャーナル』No.372　ニュー・サイエンス社　1994 a

嶋谷和彦　「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭』　兵庫埋蔵銭調査会　1994 b

嶋谷和彦　「堺出土の銭鋳型と“堺型模鋳銭”」『日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨』　日本考古学協会　1994 c

嶋谷和彦　「中世における国内模鋳銭の生産と流布」『お金の玉手箱 ― 銭貨の列島2000年史 ―』　国立歴史民俗博物館　1997

鈴木公雄　「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』61 ― ３・４　三田史学会　1992

鈴木公雄　「永楽銭の東西分布 ― 出土六道銭・備蓄銭の地域別分布の検討から ―」『社会経済史学会第63回全国大会報告要旨』　神戸大学　1994

鈴木廣司ほか　『平安京左京八条三坊 ― 調査報告第６冊 ―』　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982

富沢　威・嶋谷和彦ほか　「中世銭貨の化学組成」『堺市文化財調査概要報告第61冊』　堺市教育委員会　1997

中島圭一　「能ヶ谷出土銭の史的位置」『能ヶ谷出土銭調査報告書』　能ヶ谷出土銭調査会・町田市教育委員会　1996

中島圭一　「中世貨幣の普遍性と地域性」『帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集　中世日本列島の地域性 ― 考古学と中世史研究6 ―』　名著出版　1997

永井久美男編　『中世の出土銭 ― 出土銭の調査と分類 ―』　兵庫埋蔵銭調査会　1994

永井久美男編　『中世の出土銭　補遺Ⅰ』　兵庫埋蔵銭調査会　1996 a

永井久美男編　『日本出土銭総覧　1996年版』　兵庫埋蔵銭調査会　1996 b

森　浩一　「'93考古学随想」『アサヒグラフ』No.3737（1993 古代史発掘総まくり）　朝日新聞社　1993

山本雅和　「平安京左京八条三坊出土の銭鋳型」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』3　京都市埋蔵文化財研究所　1996

横山浩一　「日本考古学研究の動向総説」『日本考古学年報46（1993年度版）』　日本考古学協会　1995

脇田晴子　『大系日本の歴史7　戦国大名』　小学館　1998

付載　中世出土銭貨主要文献目録（1993年～1996年）

秋山浩三　「経塚出土銭貨の性格」『出土銭貨』No.6　出土銭貨研究会　1996

足立順司　「経塚出土の銭貨」『10周年記念論文集』　静岡県埋蔵文化財調査事務所　1995

網野善彦　「貨幣と資本」『岩波講座　日本歴史』第9巻（中世3）　岩波書店　1994

荒川正夫　「七つ甕と銭貨 ― 中世の埋納銭の祭祀・呪術性をめぐって ―」『二十一世紀への考古学 ― 桜井清彦先生古稀記念論文集 ―」　雄山閣　1993

生田周治　「調布市下石原遺跡出土銭について」『出土銭貨』No.5　出土銭貨研究会　1996

井阪康二　「六文銭考」『出土銭貨』No.4　出土銭貨研究会　1995

市橋一郎　「栃木県下の中・近世の土壙から出土した埋葬銭について」『唐澤考古』No.14　唐澤考古学会　1995

稲田道彦・片桐孝浩・川口　敏　「香川県津田町から出土した中国古銭の報告」『出土銭貨』No.5　出土銭貨研究会　1996

内山俊身　「総和町小堤出土の中世埋納銭について ― 下河辺荘小堤郷の中世的景観から ―」『茨城史林』No.19　茨城地方史研究会　1995

太田由紀夫　「12～15世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布 ― 日本・中国を中心として ―」『社会経済史学』No.61 ― 2　社会経済史学会　1995

太田幸博ほか　1993年『"一の宮町"出土古銭』　熊本県一の宮町教育委員会　1993

尾上　実編　『摂河泉文化資料』No.42・43（特集　近畿の備蓄銭）　摂河泉地域史研究会　1993

尾上　実編　『摂河泉文化資料』No.44（特集　近畿の備蓄銭II）　摂河泉地域史研究会　1995

河野真知郎　「中世鎌倉銭貨考」『創立三十周年記念　鶴見大学文学部論集』　鶴見大学　1993

貴志高陽ほか　『能ヶ谷出土銭調査報告書』　能ヶ谷出土銭調査会・町田市教育委員会　1996

工藤清泰　「私は緑の銭（じぇんこ）が好き！ — 中世埋納銭の一考察 —」『年報・市史ひろさき』No.5　弘前市史編さん室　1996

工藤竹久　「陸奥・根城跡出土の私鋳銭」『坂詰秀一先生還暦記念論文集　考古学の諸相』同記念会　1996

倉澤正幸　「長野県上田市岩門出土の備蓄銭」『出土銭貨』No.4　出土銭貨研究会　1995

栗原文蔵　「川島・上井草出土の備蓄古銭」『研究紀要』No.16　埼玉県立歴史資料館　1994

栗原文蔵　「一緡の実左右」『研究紀要』No.18　埼玉県立歴史資料館　1996

小池　聡　「神奈川県小田原市小船森地区内遺跡」『備蓄銭とその出土状態』　出土銭貨研究会　1996

古賀信幸　「大内（多々良）氏と周防国内の出土銭貨」『日本考古学協会1994年度大会発表要旨』日本考古学協会　1994

小葉田　淳　「日本中近世の貨幣事情」『方泉處』No.7　ハドソン東洋鋳造貨幣研究所　1994

駒形敏朗　「下道遺跡」『長岡市内遺跡発掘調査報告書 — 舞台B遺跡・徳平遺跡・下道遺跡 —』長岡市教育委員会　1996

是光吉基　「国内出土のいわゆる“無文銭”について」『考古論集 — 潮見浩先生退官記念論文集 —』　同記念事業会　1993

櫻木晋一　「博多遺跡群の出土銭貨（2）」『法哈噠』No.2　博多研究会　1993

櫻木晋一　「九州における中世末の銭貨流通 — 出土洪武通寶を中心に —」『社会経済史学会第63回全国大会報告要旨』　神戸大学　1994

櫻木晋一・市原恵子　「阿蘇郡長陽村出土の備蓄銭」『九州帝京短期大学紀要』No.6　九州帝京短期大学　1994

櫻木晋一・赤沼英男・市原恵子　「洪武通寶の金属組成と九州における流通問題 — 黒木町の出土備蓄銭を中心に —」『九州帝京短期大学紀要』No.7　九州帝京短期大学　1995

芝田　悟　『加州鶴来　金劔宮仏供箱と出土銭貨 — 天文二四年銘文資料から —』　石川県鶴来町教育委員会　1996

嶋谷和彦　「中世の鋳銭 — 堺出土の模鋳銭資料を中心に —」『第3回鋳造遺跡研究会資料集』鋳造遺跡研究会　1993

嶋谷和彦　「中世の模鋳銭生産 — 堺出土の銭鋳型を中心に —」『考古学ジャーナル』No.372　ニュー・サイエンス社　1994

嶋谷和彦　「中世都市・堺出土の模鋳銭鋳型」『方泉處』No.7　ハドソン東洋鋳造貨幣研究所　1994

嶋谷和彦　「一枚の銭（2）―堺環濠都市遺跡（SKT271地点）出土の“崇寧重寶”―」『関西近世考古学研究会会報』No.25　関西近世考古学研究会　1994

嶋谷和彦　「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭』　兵庫埋蔵銭調査会　1994

嶋谷和彦　「堺出土の銭鋳型と“堺型模鋳銭”」『日本考古学協会1994年度大会発表要旨』　日本考古学協会　1994

嶋谷和彦　「中近世出土銭貨研究の近況―1994年の研究会から―」『関西近世考古学研究会会報』No.27　関西近世考古学研究会　1995

宗臺秀明　「銭の模鋳とその意味」『今小路西遺跡』　今小路西遺跡発掘調査団　1993

宗臺秀明　「中世の模鋳銭と社会―鎌倉の事例を中心として―」『中世都市研究』No.3　中世都市研究会　1994

宗臺秀明　「鎌倉の模鋳銭」『中世の出土銭』　兵庫埋蔵銭調査会　1994

鈴木公雄　「永楽銭の東西分布―出土六道銭・備蓄銭の地域別分布の検討から―」『社会経済史学会第63回全国大会報告要旨』　神戸大学　1994

鈴木公雄　「関東―永楽銭の東国集中―」『日本考古学協会1994年度大会発表要旨』日本考古学協会　1994

鈴木公雄　「出土銭貨からみた中世後期の銭貨流通」『“中世”から“近世”へ―帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集　考古学と中世史研究5―』　名著出版　1996

鈴木公雄　「中世出土銭貨一覧」『新版　日本史辞典』　角川書店　1996

鈴木　宏　『お金と人の世』　岩手県立博物館　1993

鈴木正貴　「清洲城下町遺跡出土の銭貨――般的に出土する銭貨の評価を巡って―」『備蓄銭とその出土状態』　出土銭貨研究会　1996

高橋　学　「秋田県内出土の銭貨資料集成」『研究紀要』No.11　秋田県埋蔵文化財センター　1996

滝沢武雄　『日本の貨幣の歴史』　吉川弘文館（日本歴史叢書・新装版53）　1996

竹原　学・木下　守ほか　『松本市小原遺跡II』　松本市教育委員会　1993

中世研究プロジェクトチーム　「神奈川県下出土の中世銭貨について」『かながわの考古学第4集　神奈川の考古学の諸問題』　神奈川県立埋蔵文化財センター　1994

辻本　武　『吉野遺跡発掘調査概要・III』　大阪府教育委員会　1995

辻本　武　「吉野遺跡出土の備蓄銭―中世備蓄銭の緡銭における裏表の連続は偶然か作為か―」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第32回）資料』　大阪府教育委員会　1995

鶴田多々穂・櫻木晋一　「朝倉町出土の備蓄銭」『九州帝京短期大学紀要』No.5　九州帝京短期大学　1993

戸根与八郎・鈴木俊成　「小重遺跡出土の備蓄銭について」『研究紀要　1995』　新潟県埋蔵文化財調査事業団　1995

中島圭一　「文献から見た貨幣 ― 中世史学の動向 ―」『出土銭貨』創刊号　出土銭貨研究会　1994

中島圭一　「中世貨幣の普遍性と地域性」『第6回考古学と中世史研究シンポジウム　日本列島の地域性』　帝京大学山梨文化財研究所　1995

中山真治　「武蔵国府関連遺跡M47 ― S X13」『備蓄銭とその出土状態』　出土銭貨研究会　1996

永井久美男　『中村出土銭』　兵庫県神崎町教育委員会　1993

永井久美男　『石在町出土銭と公智神社出土銭』　西宮市教育委員会　1994

永井久美男　『山崎町の中世・近世銭貨』　兵庫県山崎町教育委員会　1994

永井久美男　『阿波海南　大里出土銭』　徳島県海南町教育委員会　1994

永井久美男編　『中世の出土銭 ― 出土銭の調査と分類 ―』　兵庫埋蔵銭調査会　1994

永井久美男　「近年出土資料にみる中世末期出土銭の地域性と問題点 ― 主として北日本・中部・九州の資料から ―」『出土銭貨』No.4　出土銭貨研究会　1995

永井久美男編　『中世の出土銭　補遺Ⅰ』　兵庫埋蔵銭調査会　1996

永井久美男編　『日本出土銭総覧　1996年版』　兵庫埋蔵銭調査会　1996

西川卓志　『銅銭の考古学』　西宮市立郷土資料館　1993

橋口定志　「“埋納銭”の呪力」『新視点日本の歴史』第4巻・中世編　新人物往来社　1993

橋口定志　「“埋納銭”研究の現段階」『研究所報』No.18　帝京大学山梨文化財研究所　1993

橋本久和　「中城遺跡」『高槻市文化財調査概要 XXII　嶋上遺跡群20』　高槻市教育委員会　1996

林　洋市　「古銭」『龍ヶ崎市史　中世史料編　別冊』　龍ヶ崎市教育委員会　1994

平泉研究会　『第1回出土貨幣検討会資料』　1996

広川達麻・足立順司ほか　『大門出土古銭調査報告書』　静岡県森町教育委員会　1993

福島政文　「一括出土銭について」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告II　北部地域南半部の調査』　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1994

福島政文　「草戸千軒出土の大型銭」『草戸千軒』No.226　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1994

福島政文　「緡銭の調査 ― 広島県草戸千軒町遺跡の場合 ―」『中世の出土銭』　兵庫埋蔵銭調査会　1994

藤沢典彦　「六道銭の成立」『出土銭貨』No.2　出土銭貨研究会　1994

保立道久　「中世の銭の研究の方向について」『出土銭貨』No.4　出土銭貨研究会　1995

前川祐一郎　「戦国期京都における室町幕府法と訴訟 ― 撰銭令と徳政令を中心に ―」『中世人の生活世界』　山川出版社　1996

宮　宏明・小川康和　「渡来銭とガラス玉 ― 余市出土の銭貨をめぐって ―」『出土銭貨』No.6　出土銭貨研究会　1996

宮田　満　『福生市の中世大量埋蔵銭』　福生市郷土資料室　1996

山川公見子　「六十六部聖による埋経遺跡と出土銭貨」『出土銭貨』No.6　出土銭貨研究会　1996

山田邦和　「京都における渡来系銭貨の生産と流通」『日本考古学協会1994年度大会発表要旨』　日本考古学協会　1994

山本雅和　「平安京左京八条三坊出土の銭鋳型」『研究紀要』No.3　京都市埋蔵文化財研究所　1994

渡　政和　「絵画資料にみる中世の銭（上）― 緡銭の表現を中心に ―」『研究紀要』No.15　埼玉県立歴史資料館　1993

渡　政和　「絵画資料にみる中世の銭（下）― 緡銭の表現を中心に ―」『研究紀要』No.16　埼玉県立歴史資料館　1994

渡　政和　「中世文献史料における“緡銭”表現について」『出土銭貨』No.5　出土銭貨研究会　1996

渡　政和　「銭貨 ― 考古・文献・絵画資料からみた緡銭の表現 ―」『歴史手帖』No.24 ― 7　名著出版　1996